

りと雖も好みに随いて之を示さん。文句の九に云く、「初心は縁に紛動せられて、正業を修するを妨げんことを畏る。直ちに専ら此の経を持つは、即ち上供養なり。事を廢して理を存するは所益弘多なり」と。此の釈に「縁」と云うは五度なり。初心の者が兼ねて五度を行ずれば正業の信を妨ぐるなり。譬えば小船に財を積みて海を渡るに財と俱に没するが如し。「直専持此経」と云うは一經に亘るに非ず。専ら題目を持ちて余文を雜えず、尚一經の誦誦だも許さず。何に況や五度をや。「廢事存理」と云うは、戒等の事を捨てて題目の理を専らにす云云。「所益弘多」とは、初心の者が諸行と題目とを並べ行ずれば所益全く失うと云云。文句に云く、「問う、若し爾らば、経を持つは即ち是れ第一義の戒なり。何が故ぞ復能く戒を持つ者と言うや。答う、此は初品を明す。後を以て難を作すべからず」等云云。当世の学者此の釈を見ずして末代の愚人を以て南岳・天台の二聖に同ず。悞りの中の悞りなり。妙樂重ねて之を明して云く、「問う、若し爾らば、若し事の塔及び色身の骨を須いさるべし、亦事の戒を持つことを須いさるべし。乃至、事の僧を供養することを須いさるや」等云云。伝教大師云く、「二百五十戒忽ちに捨て畢んぬ」と。唯教大師一人に限るに非ず、鑑真の弟子如宝・道忠並に七大寺等も一同に捨て了んぬ。又教大師、未来を誡めて云く、「末法の中に持戒の者有らば、これ怪異なり。市に虎の有るが如し。此れ誰か信すべきや」云云。

問う、汝何ぞ一念三千の觀門を勸進せずして、唯題目計りを唱えしむるや。答えて曰く、日本の二字に六十六国の人・畜・財を撰尽して一も残さず。月氏の兩字に豈七十箇国無からんや。妙樂云く、「略し